慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	From Reading to Talking. あるいは文理融合を越えて
Sub Title	
Author	佐倉, 統(Sakura, Osamu)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.6, (2009. 1) ,p.1- 1
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000006-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2009 January No, 6

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

From Reading to Talking. あるいは文理融合を越えて

東京大学大学院情報学環・教授　佐倉　統

理系／文系という分け方が、嫌いである。単に好き嫌いの問題ではなく、もはやこの分け方には存在理由が微塵もないと思っている。しかし、いまだに両者の間にさまざまな差異が存在するのも確かだ。たとえば、学会発表のスタイルからして、あまりに違う。

ぼくは、大学院で霊長類学のトレーニングを受けて博士号を取得してから、専攻分野を科学史や科学哲学に変えた。生態学や動物行動学の学会発表では、当時はパワーポイントはなかったから 35mm スライドや OHP を使って、図表や模式図を示しながら進めるのが普通だった。メモは持っても原稿は持たない。聴衆の顔を見て話す。これ、常識である。

ところが、国際生物学史学会に初めて参加したときは驚いた。こういうビジュアル資料を使うのは少数派で、ほとんどの人がひたすら原稿を読み上げているのだ。日本語であっても集中して聞かないと理解できないような抽象的な話を、英語でべらべら話されても、ぼくの英語力では理解が難しい。おまけに、発表時間が残り少なくなってくると、どんどん早口になっていく。こちらは時差ボケ。必然的に居眠りする。むなしい。仮にも「国際」学会たるもの、非英語圏の研究者にも配慮して、要点だけでも図示してくれないか――そんな要望を学会のニュースレターに寄稿したこともある。

やや古風な英語では、学会で発表することを “read a paper” と言う。その昔は、学会発表には完成版の原稿を用意し、発表が終わったら事務局にそれを提出するというスタイルだったのだ。出そろった論文を集めて、紀要として出版する。そんな時代の名残である。しかし、今でもそれを文字通りに実行する必要はあるまい。わかりやすいビジュアル資料を使い、聴衆の方を向いて、大きな聞き取れる声でゆっくりと talk しよう。

もちろん、言葉の論理が重要な学問分野においては、書くことで思考の動きを固定化し、揺れを良い意味でなくすことも必要である。たとえば法律学の議論などでは、一言一句の微妙なニュアンスの差異が、結果として大きな違いにつながることもありうる。人の一生を左右しかねない。このような学問分野では、パワーポイントの模式図ではなく、練り上げた文章を提出することが重要になる。

大事なことは、時と場合に応じて、目的にかなった手法や方法を使い分けられるようになることだろう。ひとりでやれなければ、チームを組む。いずれにせよ、違いを溶け合わせて一緒にするのではなく、違いを共存させることが必要なのだ。文系と理系は融合するものではなく（そんなことできっこない）、越境するものなのだ。

この GCOE のすばらしい点のひとつは、学際的な内容を理念として掲げながら、その説明に「文理融合」という用語がほとんど登場しないことだ。その意気やよし。期待しています。

Contents

From Reading to Talking.
あるいは文理融合を越えて　1

外部評価委員会発表報告　2

functional MRI の実習　4

講演会報告
「教会装飾におけるロジック」　5

活動報告　6

研究員紹介　7

事務局だより　8